MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

2019. 12. 15　発行元

第 15 号　伊藤　剛

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ヴァン・ダイン ベスト表

最近のミステリ雑誌に、名前が出ることがほとんどなくなってしまったヴァン･ダイン。しかし、ミステリの歴史の中では非常に重要な位置に立っている。本格物黄金期の幕開けを飾る大作家。忘れないでほしい。

「6作だけ」とは言ったものの…

ヴァン・ダイン。本名ウィラード・ハンチントン・ライト。元々は新聞編集や美学論関係の仕事をしていた。第一次世界大戦の時期にパリで過ごし、アメリカに戻った時点で神経衰弱になった。

２年以上の時間を病院で過ごすことになって、気分転換の意味でミステリ、怪奇小説を読むことにし、徹底した分析を始めた。「これなら自分に書けないはずはない」と思うようになり、病気回復後、第１作『ベンスン殺人事件』を書いた。

爆発的に売れ、予想外の収入を得た。いつしかミステリ作家が本業のようになってしまった。初めの頃に「一人の作家に６つ以上の推理ものの立派な“想”があるか疑わしい」と言っていたのに、結局は１２作の長編を仕上げた。

もっとも、最後の２作は、周りからの要望で、しかたなく書いたような作品で、出来もかなり落ちている。「一人の作家、立派な作品は６作」という表現はある意味正しいのかもしれない。

私は、大学生になってミステリを読み始めた時、エラリー･クイーンの諸作の次に手を伸ばしたのがヴァン･ダイン。まだミステリに関する知識そのものが少ない時期だったので、その面白さに夢中になった。

名探偵ファイロ･ヴァンス

ヴァン･ダインは自分なりの考えを「論」にまとめている。『推理小説論』『推理小説作法の二十則』（ともに創元版では『ウインター殺人事件』に所収）を書いている通りに、コチコチの本格もの、謎解きものとしてミステリを捕えている。２０世紀初頭の考えとしては、この理解が妥当なのだと思う。彼の初期のミステリ作品は、その典型的な形を示していると受け止めてよい。

ただ、人気を博した一端は、「謎解き」よりも、名探偵ファイロ･ヴァンスのペダントリーによるところが大きい。ペダントリーとは「衒学的」と訳されているが、学・知識の豊富さで回りの人たちを振り回し、惑わす言動である。その名探偵振りが想像つくものと思う。

最初の作品の『ベンスン殺人事件』は、１９２６年の作。『ベスト表』の第１位に挙げた『僧正殺人事件』は、「コック･ロビンを殺したのはだあれ？」の、マザーグースの引用が有名。“見立て殺人”の代表作。その後のエラリー･クイーンなどに多大な影響を与えた。

『ベスト表』に載せた順位は、他の人からもあまり異論の出ない所だと思う。２位が『グリーン家』、はっきりしている。一家の中で起こる連続殺人事件。遺言がらみの狡猾な犯罪計画。ヴァン･ダイン作品のなかでは最もスリルに満ちたものである。

《ヴァン・ダインのベスト表》

１．僧正殺人事件　④
２．グリーン家殺人事件　③
３．ベンスン殺人事件　①
４．カナリア殺人事件　②
５．カブト虫殺人事件　⑦
６．ケンネル殺人事件　⑥
７．ガーデン殺人事件　⑤
８．ドラゴン殺人事件　⑧
９．カシノ殺人事件　⑨
１０．誘拐殺人事件　⑩
１１．グレイシー･アレン殺人事件⑪
１２．ウインター殺人事件　⑫

私が持っているのは、全部創元推理文庫版。丸数字は発行順。初期の４作のレベルが高い。９番以降は、ちょっと……。

海外ミステリ
この1冊･連載8

S･A･ステーマン『六死人』『三人の中の一人』

今回は「この一冊」ではなく、「この２冊」になってしまった。今号で取り上げたのはフランスミステリ。（正確には、ステーマンはベルギー人。）　フランスのミステリものと言えば、パッと「ノワール」が思い浮かぶが、ステーマンの作品は、珍しく謎解き本格物。パズラーである。

一冊目の創元推理文庫から出ている『六死人』は、１９３０年の作で、クリスティの『そして誰もいなくなった』よりも８年前に、関係者が次々殺され、誰もいなくなるという話を作り上げている。同じく創元推理文庫から出ている『殺人者は 21 番地に住む』では、「読者への挑戦」が組み込まれ、フェアプレイに徹しようとしている。二冊目として題名を挙げた『三人の中の一人』。私の持っている本は、番町書房から出ている「ｉｆノベルス」の中の一冊。松村嘉雄の訳。同時代のヴァン・ダインを意識した舞台設定で、弾丸の軌跡を探る方法とかピストルを検証する場面とか、パズラーとして謎の追求にこだわりを示してみせる。ステーマンの作品で日本語訳になっているのは４冊ぐらいだろうか。思いのほか少ないのが残念。